

郷土室だより

第123号

平成17年10月1日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 17-036

「変りゆく都市像」(2)

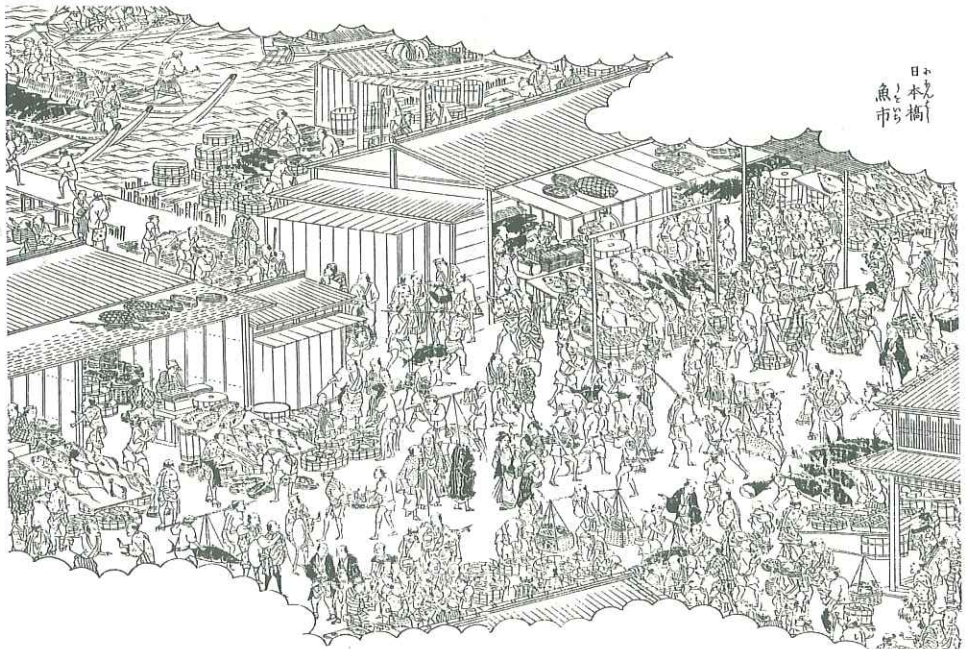
◇都鄙問答

はじめに都市とは何か、都市という熟語にはどのような意味があるのかということについて、改めて漢字の意味から考えてみることにします。このような、いわば分り切ったようなことを取り上げたのは、それなりに苦い経験があるからです。

それは、ひとくちに「都市」といったり、文章で「都市」のことを書いても、受け手によっては干差万別に「受信」されるからです。結論を先にしますと、私のいう

「都市」とは高層ビル・宮殿などの建物や、人口数などで代表される《都市の風景》などではなく、「都市」とはそれを示す漢字の意味のとおり「いちば」市場が集まった場所を意味します。前後しますが「都」という漢字も、本来は「すべてが集まる」という意味で、「総て」を全部あわせたことを意味する「都合」Ⅱ（総合計の意味）

日本橋
魚市



『江戸名所図會 上』より

をはじめ「総て」が集まった状況を意味する「都合」などという熟語が良く知られています。

また「都」には権力者の所在

地としての意味もあって、日本の場合は「都Ⅱみやこ」という読み方もあります。

この「みやこ」とは逆の状況

を示す文字に「鄙」(和訓では鄙)があります。それは「みやこ」といなか「ひな」を対比させる意味の熟語として「都鄙」という熟語も生れました。ですから昔から「鄙には稀な美人」といった形容詞の付いた美人を意味する、いわばいなか差別の言葉もよく使われていました。

注 『都鄙問答』

これから徐々に「都市」の主人公であった商人の役割の変遷を述べていく予定ですが、「都鄙」という対比の表現に続いて「問答」という、これもまた対比の方法を書名にした本とその著者のことを簡単に述べましょう。

それは江戸時代中期の元文四(一七三九)年に、大坂の心学(町人学)者である石田梅岩がまとめた「都鄙問答」という本で、十八世紀前半の

時代になつてもなお、武家階級や儒学者などの間では「抑商論」(商行為そのものに嫌悪感を持ち、商業を抑圧しようとする感覚ないし議論)が強かった時代でしたが、梅岩は

商業活動の正当性を主張すると同時に、町人には町人としての倫理性があること、いかなれば現在の流行語である「企業の社会的責任(CSR)」への言及までを、問答体の文章で親切に書かれているものです。

◇市・市場・いちば

改めて都市という言葉の使い分けについて整理すると、おおよそ次のようになります。

市とは人と人が出合つて、互いが持つているモノを見比べて、自分が欲しいと思つたモノを譲つてくれるように相手に相談して、相手が納得してから自分のモノと相手のモノを交換(物物交換)したり、貨幣を使って売買することです。

この単純に見える行為が成立するためには、交換したり売買する人々の関係が、平和でなければなりません。嘘や暴力や権力を影響させて相手のモノを手に入れた場合には交換・売買ではなく、市ではありません。日本の市はそうい

う「力」には極端に敏感で、とても繁昌していた市が外からの干渉の気配でも感じると、直ぐに成立しなくなりました。

市の発生は多分、見知らぬ人と人が偶然に出合つて、平和的に取引をしたことに始まつた事でしょう。そして、そのことが両方の人の記憶に残っている場所でもあつた事でしょう。例えば、それは峠の下にある胡桃の原木が目印だつたりしました。

それともう一つの場合は、山の麓と平地の境・川の渡りやすい場所・湖や海の岸边などの地形的な特徴のある場所であつたり、季節によつて真っ赤に紅葉する紅葉の林を目印にしたり、いつでも冷たくておいしい水が湧いていて、人だけではなく、鳥も動物たちも集まる「水場」だつたりしました。

話が飛びますが中央アジアの大沙漠地帯を中心に、東はアジア、西はヨーロッパを結ぶシルクロードは、この「水場」⇨オアシスとオアシスをつなぐ道でもありました。また大陸だけではなく大洋(太平洋・大西洋・インド洋……その他の海)では、海の中の川ともい

える海流を利用したり、その名も貿易風や季節風を利用してごく自然に「海上の道」を探り出してきました。

つまり、自然発生的な市は飲み水と食糧が得られやすい場所、著しい目印や、季節的に多くの異なる文化を持つた人々が集まりやすい場所などに出来あがつていきました。

「異なる文化を持つた人々が集まりやすい場所」に、決まつた季節や月の満ち欠けに依じて市が成立するようになると、そこは市の場所⇨市場となり、その場所に定住する人々も出てきました。繰り返しますがそこは平和で平等な空間でした。武力をもつ領主や宗教的権威がほんの少しでもその場所に影響すると、市の場所⇨市場は二度と開かれなかつたのです。

日本の場合には市の発生は縄文時代代だつたことが三内丸山遺跡の発掘で確認されています。書かれた記録では中世(約十〜十六世紀)のものが残されています。その場合には市場の有用さは誰よりも権力者・権威者が痛感していた都市施設としてでした。そのためにい

ろいろな特権や便宜を与えて市場を自己の力の及ぶ範囲に取り込む事に努力もしています。

その結果、市場は市場として成立して支配層の「金庫」的な存在になったのです。歴史上に有名なことに織田信長が自分の領地内に「楽市・楽座」（関税不要の市場）を宣言（天正五〇一五七七年）したことが良く知られていますが、実はそれより一世代ほど前の天文十八（一五四九）年には、近江国蒲生郡の守護だった佐々木氏が、自分の居城である観音寺城の城下町に「楽市・楽座」を宣言して開市したことが文書に残されています。

分けています。

◇文章と心象風景

このように市は、いわば自然発生的・偶然的に生れ、やがて季節的な市へ、そして定期的に開かれる市になって行きました。このことは市は人が商業活動を必要とする動物であること、それは人間社会の変化に応じて形や場所も変化していったことから、私は都市というもののあり方を、江戸・東京という具体的な場所を追って行く事で、それぞれの時代における江戸の姿、つまり江戸の「いちば」の変遷をこの半世紀の間、追いつけてきました。

このことは一見開明的な市場が成立したようですが、守護クラスの領主に「市」のあり方を保障されるほど、本来の市の姿が失われていたことを物語るものでもありました。つまり、市が「楽市・楽座」を称する市場に変質していたのです。

その方法はある事実を確認することにより歴史書の解釈を再検討したり、河川（自然）と市との関係の見直しであったり、城という施設と市との関係やその都市計画の再検討であったりしましたが、いつも心掛けてきたのは「都市史」を調べるには、それぞれの時間（歴史）と空間（地域）の関係を絶えず比較することだと思っています。

そうした私にとっての衝撃的な事実がありました。古くから私の都市史に共鳴してくれた一人で、いわゆる「まち造り」の研究者兼行政的活動を懸命に続けている人がいます（ここでは仮にK氏と呼ぶことにします）。

K氏は長い年月をかけて都市とは「いえなみ」や「ビル」などのハコモノが続く、いわばハードな建物空間のことではなく、「いちば機能」のある部分（ソフトの役割を果たす部分）が本当の意味での「都市」だということを、自ら検証を重ねて理解してくれているのですが、その具体的な有様に付いては、いくら説明を重ねても彼の心象風景には、市場といえは築地市場や再開発される前の秋葉原にあった神田市場、それが移転した大田市場などの公設生鮮食品市場の巨大な偉容を連想してしまうのです。

また兜町（中央区）にある東京証券取引所も「市場」だったといっても、それも彼の心象風景からはみ出してしまっている存在でした。重ねて言えば、バブル最盛期には貨幣・為替の価格の変動や株式

の取引市場風景をテレビ各社は殆ど「毎時」ごとに実況放送的に放映した時期がありました。それは民間の有力ディーラー（取引人）たちがディーラーのテーブルを取り囲んで相場を形成している風景でした。

あの人々が各自で電話などで耳にした情報を、個人的に瞬間的に判断して自分が最良だと思いう金額で売買する風景そのものが「いちば」の原風景であり、日本語での「仕切り」⇨相撲の立会いの仕切りと同じ意味で、「待ったなし」の真剣勝負の間でもあります。生鮮食品市場でのセリの場合も一旦決まった値段には訂正は利きませ

また骨董や絵画などの市場での、オークション（セリ⇨競売）風景、とくにロンドンやニューヨークの会場の風景は荘重極まる雰囲気ですが、実質的には日本の青果市場で毎日行なわれている人參や大根のセリと同じ行為なのですが、けれどもK氏にはあの風景が都市の原形である市の状況だ

とはどうしても考えられないので
す。

愛すべき一人人としてのK氏の
心象風景の主張にはこれ以上立ち
入ることは出来ませんが、いわゆ
る「街づくり」作業を義務とした
K氏が、都市の原形についてさら
に困惑するであろう話題を紹介し
ましょう。

都市の形については、フランス
の思想家・記号学者であるロラ
ン・バルトが東京の現実を見て、
中心が空虚な都市だと批評して以
来、日本人の都市観が彼の説を支
持する形に根強く定着していて、
○五年にはその都市観をそのまま
踏襲したような宗教学者による著
書が大評判になつてゐるほどで
す。

次の注の文章は『天皇百話 下
の巻』編者 鶴見俊輔・中川六平、
筑摩書房、「ちくま文庫」八九年刊
より文意を損なわないように配慮
して、部分的に引用したものです。

注 ロラン・バルト Roland
Barthes (一九一五～八〇)

前記の文庫本には「一九六六(昭
和四十一)年に来日し、自分が受
けた日本と日本人の印象を分析し

た著書『表徴の帝国』(宗左近訳、
新潮社、昭和四十九年刊)を發表。
次の「中心—都市 空虚の中心」

の部分はその後の日本人による
「天皇・天皇制」論に影響を与え
た。引用は同書四九一頁より」
とあるものです。なお部分的引用
文の中の【】内はここに引用し
た私の感想です。

「四角形の、網状の都市(たと
えばロスアンジェルス)は、深
い不快感を生むといわれている。
こういう都市は、わたしたちのな
かにある都市についての一つの
曼陀羅^{マントラ}感覚、つまりそこへ行き、
そこから帰ってくる一つの中心、
そこを夢み、そこへおもむきそ
から取つてかえす、一口にそこで
おのれを発見する一つの完全な場
所をいっさいの都市空間が内部に
もつていけるとする感情、これを傷
つけるのである。」

【そうだとすると、ロスアンジ
エルスと同様に平安建都以来、
千二百年を越す「網状の都市」
京都をもつ日本人はどのような
挨拶をすべきなのでしょうか】

【中略】わたしの語ろうとして
いる都市(東京)は、次のような

貴重な逆説(いかにもこの都市は
中心を持つている。だが、その中
心は空虚である)という逆説を示
してくれる。

【統^ばつて彼は徳川幕府の本拠
だった江戸城の範囲を、そのま
まの皇居を「禁城」と書き、「誰
からも見られることのない皇帝
の住む御所」と表現して、その
周りを「タクシーは急速に精力
的にこの円環を迂回している」
という状況を述べた上で】

「(中略)都市のいっさいの動き
に空虚な中心点を与えて、動きの
循環に永久の迂回を強制するため
に、そこにあるのである。このよ
うにして、空虚な主体にそつて、
【非現実的で】想像的な世界が迂回
してはまた方向を変えながら、循
環しつづつ広がっているわけなので
ある。【と、述べています。】

◇一神教と多神教(汎神論)

ロラン・バルトはカトリック
の国フランス生れの人です。ロ
シア正教を含む新旧のキリスト

教も、イスラム教も強烈な一神
教が建前です。仏教の場合は宗

派によつて「仏」や「経」の解
釈が違いますが、神道の場合は
八百万の神々がこの世界に充滿
している「宇宙」です。このよ
うに唯一絶対神への信仰の強い
地域と、妖怪まで神にしてしま
う民俗をもつ国とではこの世の
「世界」に対する感覚が違うのは
当然のことです。

一神教信仰圏ではこの世の中に
確固たる揺るぎ無い「中心」が求
められるのは当然のことではし
ょう。しかし、この列島では「祈ら
ざれど、神やおわさむ」(神は存在
する)とする、いわば汎神論の時
期が長い間続きました。

この事実について現代的感覚で
批評をすれば、どのような結論も
出し得るはずですが。しかし事実を
事実として冷静に一神教信仰圏と
比較すれば、汎神論の合理的なこ
とも理解できそうです。ここで紹
介したいことは、後に改めて取り
上げるように、少なくとも一五世
紀初頭には、日本の「いちば」も
神の思召^{シメガミ}で成立していたので
す。

(続く 鈴木理生)